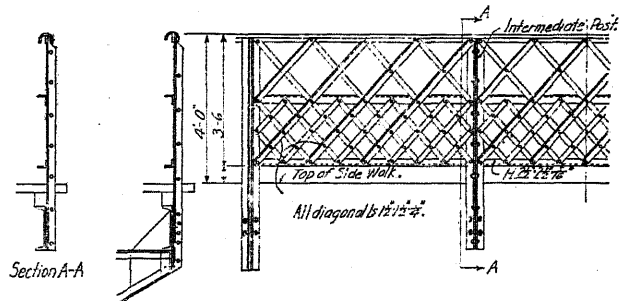


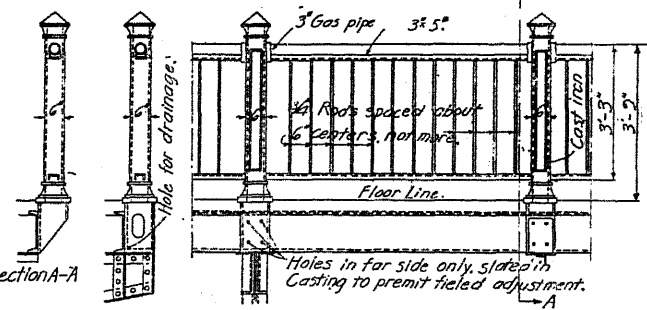
# 第十四章 高 欄

高欄 (Hand rail or Railing) は橋梁の種類及位置に従つて相當の裝飾的形式を有せしむる。輕い道路橋に於ては輕い高欄を造り、市街地に於ては美觀を第一とすべきは勿論なるも亦水平推力 (50~100 kg/m) に對しても充分の強度を有せしめねばならない。束柱は完全に上部構に緊結し、貫は束柱に取付くる。高欄の形式及高には種々あるが、家畜の群が通る橋梁では普通其の高を 1.3~1.6 m となし、歩道に設くる場合は 1.0~1.2 m となす。餘り高過ぎるものは却て障礙となる事が多い。高欄の隙間は裝飾的意義を外にしては敢て密なるを要せざるも、幼兒又は動物が入りきれない大きさ即 15 cm 以下たるを要す。材料には鑄鐵、鑄鋼又はセミスチールを用ひ、時としては束柱に鐵筋コンクリートを建てることもある。田舎の橋梁の高欄には瓦斯管を用ふるが、其の際は三本以上の瓦斯管を用ひ、上部には75mm 下部には50~60mm 直徑のものを使用する。束柱は75mm

の瓦斯管若くは

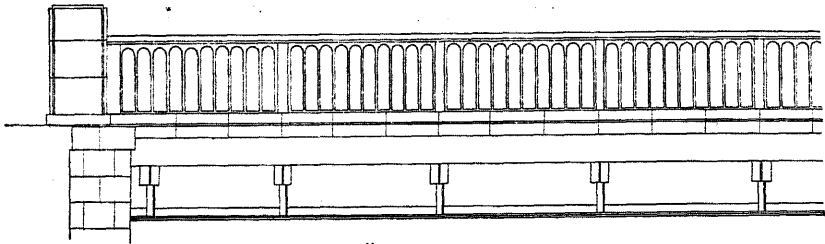


第 423 圖

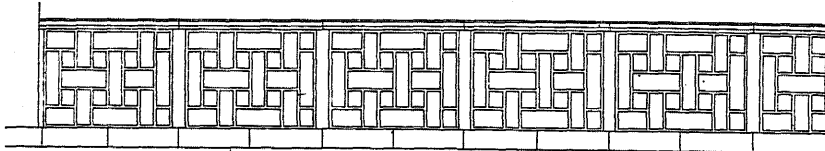


第 430 圖

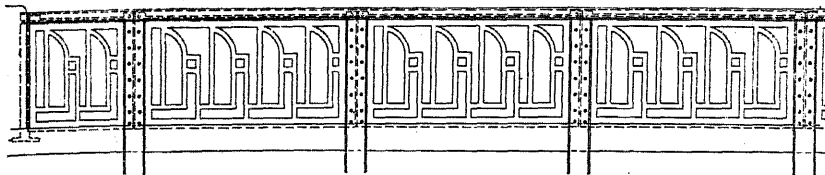
形鋼殊に I 形鋼となし、貫を入れる束柱の穴は、充分の大きさを有せしめて組立を容易ならしむる。温度の變化に應ずるためには套管伸縮接合 (Sleeve expansion joint) を必要とする。市街地に於ては屢第 429 圖の如き格構形を用ひ、少し上等のものには第 430 圖の如き形を用ふる。電車を通す場合には觸輪柱 (Trolley pole) を建てるが、下路橋に於ては觸輪線を對傾緩構に取付くる。又燈柱を高欄の線内に設くることがある。地方鐵道が道路橋を併用するときは、道路と軌道との間に高欄を設けて危險を防止する。



其 一



其 二



其 三